

母が中隊指導官殿へ一枚の名刺を差し出したところ、中隊指導官殿が「どの様な関係ですか？」と尋ね、母親が「主人の士官学校の同期です」と応えました。後で分かったことですが、それは同期である防大訓育部長（現在の教育訓練部長）から父がもらった名刺の裏に「愚息が武窓に入るので、宜しく頼む」的な事が書かれていたようです。入校生が自衛官子弟かどうかは把握していたようですが、陸軍士官学校卒業生の子弟については特に把握するという事はなかったようです。

久留米を卒業後、当時、札幌の真駒内に駐屯していた戦車大隊に赴任して間もない頃、大隊長から電話で大隊長室に来るように呼び出しがありました。大隊長室に入るとそこには北恵庭に駐屯していた第1戦車団の団長（陸士61期）が居られ、大隊長が「54期生の息子の梅田候補生です」と紹介されると、偕行社の先輩方と同様、優しい表情を浮かべ「しっかり頑張りなさい」と激励してくれました。

ただ、自衛隊内における士官学校や偕行社に対する印象は、必ずしも良いものではなかったと思います。戦後における国民一般の軍隊に対する感情は、マスコミ等の影響が大きかったのですが、陸軍悪玉海軍善玉論もこれあり、なかなか厳しいものでした。ですから陸軍将校、士官学校に対しては、なにかにつけて批判をされ、親しみや尊敬の対象にはなりにくかったのだと思います。

以下偕行社二世会員と言う立場から「偕行社」への思いを記述します。防衛大学校を卒業し、久留米の幹部候補生学校に入校前に父からまた「偕行社に挨拶に行きなさい」と言われ、再び偕行社を訪ねました。偕行社に勤務されていた父の同期生を含む数人の先輩方が、久留米の幹部候補生学校長の名前をあげて「〇〇は大陸で活躍していたから、まっとうな教育をしているだろう」と言っており、「しっかり頑張つて来なさい」と父と同じ怖い顔の先輩方が、優しく送り出してくれた事を覚えています。

二世会員としての

「偕行社」への思い

梅田 優邦 陸自78

防衛大学校への入校が決まったある日、父から「偕行社に挨拶に行きなさい」と言われ、当時、四谷の五番町にあった偕行社本部に向いたことが偕行社を陸軍士官学校の同窓会として認識したきっかけでした。

そして、防衛大学校の入校式当日、

ある時、偕行社の行事の一環として駐屯地見学、装備品展示等が計画され、駐屯地として対応しました。私は当時、最新式であった74式戦車の展示説明員として見学者を待っていました。師団司令部のある駐屯地

なので装備品の数も多く説明員も見学者が来るまでの間、思い思いに雑談していました。見学日が日曜日の午後と言うこともあったと思います。が、隊員達は一様に不平不満を口にしていました。「今日の見学者は偕行社という旧軍の幹部だった者の同窓会の連中だ」というその口調には、弾の下を潜ったことのない、即ち実戦経験のない自衛隊員が偕行社の先輩方に対して払うべき尊敬や畏敬の念など全く感じられず、一般の見学者に向けるような友好的、優しい表情とは反対に、迷惑だなあとという雰囲気を出していました。

日本陸軍も自衛隊も国防に任じた者、任じている者同士なのに何故、先輩方に冷たい対応をするのであろうかと悲しい気持ちになりました。

その様な雰囲気での装備品見学でしたから、楽しみにしていたはずの偕行社の先輩方も、迷惑を掛けて申し訳ないといったすまなそうな表情で私の戦車の前に来ました。私は大きな声で「陸士54期生の息子の梅田です。本日は最新鋭の74式戦車を見学に来て頂き有難うございます」と前置きして、いつも以上に懇切丁寧に説明しました。見学者一同の顔が、少々

の驚きとともに旧知の仲間、同窓会で戦友に再会した時のような、笑顔に変わった事を今でも覚えています。防衛大学の学生時代をはじめ、自衛官時代も偕行社の先輩方に直接的、間接的にご指導を受け、またご支援を受けた事が多々ありました。ここで感謝の意を表したいと思います。

私が54期生会の親睦会の一つである一水懇の行事に直接参画するようになったのは、再就職の会社を定年退職した令和元年からです。『偕行』誌の花だより54期生欄の行事案内の代表に、電話で参加の意向を伝えたところ、快く迎えて入れて頂きました。当時の代表は54期生の方でしたが、高齢化も進み行事に参加していた同期生の方が相次いで他界される時期でした。行事に参加される方は、ご夫人と同期生の子息、子女（二世会員）となり、同窓会の運営は二世会員が主体となりつつあった頃です。幸いな事に54期生会は、当初、父親が行事に参加する際、付き添いで参加していた子息・子女が、父親が他界した後も、同期生会に出席するようになりしました。それは父親達いつも各種行事に参加することを楽し

みにしており、同期生同士、終始和気あいあいと和やかな雰囲気でお話し、軍歌演習の締めは陸軍士官学校校歌「太平洋の波の上」を合唱し、元気な姿で帰路に就いていたので、自分たちも行事に参加してみようと思った、というのが多くの二世会員の意見のようです。

ここ数年は、新型コロナウイルス感染症防止対策上、行事の中止が続いていましたが、令和4年9月4日（日）に靖國神社に於いて開催された54期生永代神楽祭、直会には、案内状を全国142名の関係者に送付したところ、遠く長野県須坂市からご夫婦で参加された二世会員を含めて、24名の参拝者が集まりました。内訳はご夫人1名、二世会員が23名。偕行社は明治10年に「陸軍将校の親和・研鑽」を目的に創設され、昭和20年に陸軍が解体されると同時に廃止されました。戦後、復活した偕行社は運営形態こそ変わっていったものの、会員の偕行社への思いは同じだったと思います。

も共に活動していました。時代が昭和から平成に移行した頃、偕行社会員間において偕行社の在り方が検討され、従前会員数の減少に伴い、自然消滅を是とする考えの会員と、陸上自衛隊幹部、当時は退官者に限定せず戦前のように陸自現役幹部にも会員資格を拡大して、偕行社設立当時の偕行社に戻すべきだという意見を持つ会員との間で真剣な議論がなされ、最終的には元自会員に後を継いでもらおうと、今の偕行社になりました。

また、一方、現役の陸上自衛隊幹部の中には、陸軍にゆかりの偕行社に違和感を持つ人もいたようです。現在、「陸修会」への継承が検討されている事は『偕行』の記事等により承知しています。偕行社が、新たな会員が入会してくる「陸修会」に継承されるなら良いことだと思います。ただ「偕行社」の名称も継承出来るのか「陸修会」に吸収されるのかは今後検討されるのでしよう。高齢化が進む陸軍士官学校卒業生、家族会員の皆様は「偕行社」の名前に強い執着、愛着があるのは当然で、「偕行社」の名前のまま継承されることを強く希望します。特に二世会

員は元自衛官だから偕行社へ入会したのではなく、陸軍士官学校の縁で入会しているのですから。

「偕行」は『詩経』に由来する大變意義ある言葉です。「偕行社」の名称や機関誌『偕行』を継承するか否か、つまり「偕行社」の名前を変えらるのかどうかは「陸修会」との合同がなされたのち、偕行社の運営を行いつつ偕行社の歴史的地位・役割をしつかり把握したのちに、「陸修会」自身が時間をかけて検討する事であると思います。

明治、大正、昭和の陸軍解体までの偕行社が陸軍将校の共済組合的存在と軍事史研究に大いに貢献したように、現在の偕行社は戦後の同窓会的な偕行社から、本来の偕行社の姿即ち、安全保障研究や近現代史研究、政策提言などとともに関自支援の組織に変革されて、事業は活発になされていると思います。

偕行社運営の資金は、かつてそうだったように、すべて社員（陸軍将校）の拠金で支弁するようにすれば「陸修会」が引き継いだ「偕行社」の運営も資金の心配は解消するのではないのでしょうか。

参考までに昭和17年（西暦194

2）当時の偕行社義助出捐金額の基準は陸軍大将から少尉まで月額200分の1でした。

ところで、戦史教官だった同期生から、最近の幹部自衛官は戦史に興味がないと聞いていましたが、大東亜戦争を戦い抜いた偕行社会員がほとんどいなくなった現在だからこそ、本当の戦史研究が出来るのではないのでしょうか。当時の関係者がいればどうしても本人の名誉とか家族への忖度などあって、深刻な分析ができにくいものです。

歴史の素養はまさにあらゆる教養の基盤ですから、戦史研究は軍人・自衛官の教養の基盤を作るものです。戦術も戦略も戦史研究から生まれるものと思います。靖國神社には偕行社が寄贈した偕行文庫という図書館があり、明治以降の戦争に関する貴重な一次資料も含め多くの軍事、安全保障、外交関連図書が保管されています。陸修会に継承されたのちの偕行社においても近現代史研究を大いに進め、後輩・現役幹部自衛官を啓蒙してほしいものです。